夢ざめの坂

陳舜臣

下

夢ざめの坂 下

陳舜臣

講談社

江苏工业学院图书馆
藏书章

夢ざめの坂　下

定価　一四〇〇円（本体一三五九円）

第一刷発行　一九九一年六月二十四日

著　者　陳舜臣

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社　講談社

〒112　東京都文京区音羽二―一二―二一　電話　出版部　〇三―五三九五―三五〇五

販売部　〇三―五三九五―三六二三　製作部　〇三―五三九五―三六一五

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り換えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

©Shunshin Chin 1991 Printed in Japan ISBN4-06-205330-6（文2）

夢ざめの坂 下 目次

破片の行方 5
別章 II 25
うつぼ 42
木漏れ日 65
それぞれの旅 87
アルバムの空白 106
孤島にて 128
弓満の悩み 153
近づく風景 196
石をくわえて 221
終章 250

装幀　武山　忠
装画　深津真也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢ざめの坂

下

破片の行方

——あっちがデパートやったら、こっちはスーパーや。あっちが高級ホテルやったら、こっちはビジネスホテルや。

ゴールデン・ゲイトのアシタさんこと黄明日（こうめいじつ）は、かねがねそう言っていた。あっちとは、近く親戚になる「リラ」のことで、こっちはいうまでもなくゴールデン・ゲイトである。

店内の照明をおさえ、壁にはややレトロ調の上海バンドの写真をかけている「リラ」にくらべ、「ゴールデン・ゲイト」はサンフランシスコのゴールデン・ゲイトのカラー写真を、壁紙にして、店内もたいそうあかるい。

——あっちでは新聞読めんが、こっちでは新聞読めるで。

というのが、アシタさんの自慢の一つである。時間待ちに、新聞や週刊誌を読みながら、コーヒーをのむ客が多い。そのかわり、ゆっくりと話をするには、いささかおち着かないかんじもある。

「ぜんぶ申し上げましょう。私に振りまわされているというあなたのご不満は、もっともなこと

とおもいます。さきほどの訪問の件でも、あなたはご不満をさらに募らせたようにおもいますので」

ゴールデン・ゲイトのいちばん奥の席で、隆志とむかい合った森田は、コーヒーを注文したあとそう言った。隆志は黙ったままうなずいた。

さきほどの訪問の件とは、岡村奈津子のところで、「遺産」ということばを口にしたことである。森田はそのことばにたいする岡村奈津子の反応を、じっと観察していたにちがいないが、そばにいた浦上隆志に与えたショックにも気づいていたのだった。たった十五分前に、隆志は森田に、

――あなたはずいぶんたくさんなことを知って、私には情報を小出しにするんですね。

と、不満を述べたばかりである。

「あの晩のちょっとした事件のことですが」と、森田は言った。――「あれは伊庭が私に電話でしらせてくれたのです。ほんの直後にね。……かっとなって小母さんをつきとばした、と。場所も言って、はやく行くようにと……ええ、伊庭にしてみれば、もし気絶でもして、そのままにされたらたいへんだ、とおもったのでしょう。あまり人の通らない路地ですし、人が通っても、場所柄、酔っ払いとおもわれて、手当てが遅れるおそれがあります。伊庭の電話がなければ、警察は行かなかったでしょうし、岡村さんもただころんだことにしたでしょう。警察が彼女に、逃げる男を目撃した者がいると言ったので、仕方なしに暴漢にいきなり襲われたと供述したにちがいありません。……ええ、私は近くの派出所に、目撃者がいるから、と急報したんです」

ウェイトレスがコーヒーをはこんできた。店にはあるじのアシタさんのすがたはなかった。

話が岡村奈津子から竹浜弘子らしい女性のことになると、アシタさんがいては、都合が悪いかもしれない。隆志はあるじが出てこないことを願った。

ウエイトレスが立ち去ると、森田はまた口をひらいた。

「失礼ですが、浦上さんは警察のことを、あまりご存知ではありません。あの晩の事件ていどで、部署のちがう私が出てくるのは、ほんとうはおかしいのです。けれども、私は当事者なんです。伊庭の電話を受けて、急いで制服を着ましたよ。伊庭にむかって岡村奈津子に訊けとすすめたのは、さきほど申したように、この私でした。では、私がなぜ伊庭を知ったか、それを説明しなければならないでしょう」

森田の話をきくと、「あの晩の事件」については、隆志もほぼ満足できる説明を得られたとおもった。――

半年ほど前に、森田は大学時代の友人から、ある相談をもちかけられた。その友人はある総合商社に勤めている。総合商社としては日本でも五本の指にはいる大企業である。

その友人は佐野といって、同期生だし、剣道部でいっしょに汗を流した仲間で、とくに親しかったのだ。

佐野がもちかけてきた相談とは、伊庭潤という人物を調査してほしいということだった。

――おい、おい、警察を興信所がわりに使ってもらっては困るぞ。

森田ははじめそう言ってことわった。ところが、佐野は、

――警察は犯罪を捜査するだけではなく、犯罪の発生を予防するのも任務のうちではないのか。

と、詰め寄った。

——犯罪が発生するのか？

——そのおそれが多いのだ。

——では話をきこう。

ということになったのである。

佐野の会社の有力な取引先に、バンコクに本店をおく「サウスイースト・エンタープライズ」という華僑系の企業がある。中堅ていどの企業だったが、不動産に重点を置いていたこともあって、ここ数年来、急速に業績を伸ばした。業績が伸びたというより、いわゆる含み資産が膨張したというべきであろう。もともと同族会社だったが、外国企業との提携や投資など、業務が複雑になってくると、首脳部に意見の対立があらわれた。

昨年、メキシコへの投資が失敗して、かなりの損を出したのがきっかけになって、対立は表面化してきたという。佐野の会社が中に立って調停したが、うまく行かず、けっきょく、三つの企業体に分割することになった。意見を同じくする者同士が集まり、再出発するわけである。

サウスイースト・エンタープライズは、李という一族の同族会社であったが、まだ分配していない共有財産を、この際、きちんと分けることになった。

共有財産は、ほとんど不動産であった。もちろんすぐには処分できない。三分割されたうちの一企業体のトップが、時価プラス・アルファで引き取り、金銭分配という方法をとる予定である。

ところが、そういうことにきめたあと、分配金をめぐって、詐欺師が暗躍し、ある家族が破産

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

するという不祥事がおこった。分配金をあてにして、いかがわしい事業に投資する契約書にサインをしたのが原因であった。また相続関係のはっきりしていない家族内で、傷害事件もおこった。

そこで、嫡系の長老が、急遽、同族内の各家族について、きびしい調査をすることになった。問題のある家族には、しばらく分配を延期し、ようすを見ることになった。

――禿鷹のようなのが、つきまとっていないか、家族の成員の法律的身分がはっきりしているかどうか、がなりくわしく調査した結果、伊庭潤という人物には、要注意のレッテルが貼られたのだ。

と、佐野は説明したそうだ。

「日本に帰化して伊庭と名乗っているが、もともと李という姓だったのです。彼の父親がね」

森田がそう説明したころ、隆志はほぼアウトラインがつかめた。

「伊庭潤に問題があったわけですね。帰化したということですか？　法律上の身分？」

と、隆志は訊いた。

「佐野が言うには、伊庭の死んだ父親が、離婚したときに、慰藉料として、そのときの財産の大半を女に奪られているんですよ。イギリスに留学して、美術の仕事をしている伊庭潤自身には問題はありません。問題は、数十年前に伊庭の父から大金をまきあげたその母親が、どうやらまたあらわれたらしいのです。餌のにおいを嗅いで、しずかに舞いおりる禿鷹のようにね。……伊庭潤の生母というのが日本人でしてね」

と、森田は言った。

「察しがつきますね」と、隆志は軽くうなずいた。――「森田さんが熱心にさがしておられる安原マリでしょう?」

「誤解されないように申し上げますが、私が戦後の犯罪を、女性のジャンルで調べたのは、佐野と会ってからではありません。佐野は今年になってから、その問題をもちこんだのですが、私の研究はもっと早くからです。テーマをつかんで、本格的にうちこみはじめてからでも五年以上になります」

「では、その佐野さんが伊庭と言ったとき、森田さんは驚いたでしょう。ゾクゾクしたんじゃありませんか。研究テーマと偶然に一致したのですから」

「いえ」と、森田は首を振った。――「伊庭なんて名前、まったく知りませんでした。戦後のあのころの話、たいてい名前抜きになっていますね。安原マリというのも、警察の記録に、赤のクエスチョン・マークがついていますよ。私が知っているのは、安原マリが自分の子を、ある華僑の老夫婦に養子として出したとか、いや、そうではなく金持ちの老人と結婚して子供を押しつけ、財産の大半を慰藉料としてふんだくって、男とアメリカへいったとか、そんな実例です。それが、佐野君の話をきいて、これは安原マリだな、と思ったわけですよ。……」

「そうですか。ご存知の実例に、あてはまったわけですね」

隆志はそう言った。彼が杉坂房子からきいたのは、伊庭が老夫婦に養子にやられたという話である。それも本人が小学校にあがる前というから、後で大人たちにそう言われて、信じこんだのかもしれない。

「ともかく、佐野君が伊庭潤の宿泊先を教えてくれたので、さっそく会いに行きました。会わな

いことには話になりませんからね。……佐野君が頼んだのは、悪いやつがついていないかどうか、具体的にいえば、悪いばばあ、つまり母親がまつわりついていないか、ということでしたから、まず伊庭に会ってみたのです」

「それはいつのことですか？」

と、隆志は訊いた。

「さあ、二た月ほど前でしたね」

「二た月、ですか」

それは伊庭が、リラの二階から引っ越して出たころにあたる。

「大阪のホテルにいました。ビジネスホテルでしたが、かなり優雅に暮しているようでしたね」

と、森田は言った。

「どうでしたか、第一印象は？」

「情熱家ですね。一途な人です。あれくらいの年になって、あれほど一途になれるのはめずらしいとおもいます。私は好きになりましたよ。……ええ、はじめから、サウスイースト・エンタープライズに頼まれて、あなたと接触するんだ、とはっきり申しました」

「それで？」

「関係ない、と言うんですよ、あの男は。香港で会った親戚の者に、共有財産の処分、分配があることはきいたが、そんなものはいらないと彼は言いましたよ。私は警察官ですから、本心で言っているのか、恰好をつけているだけなのか、見破ることができるつもりです。その自信はあります。……伊庭のは、あれはほんものですね。たしかに、心からそう思っています」

「欲がないのですか。……」
「欲はあります。……どういうのか……その、芸術的な欲ですね。……金銭的な欲望はないとみました」
「芸術的な欲望ですか。……」
隆志は昨夜リラのオーナーといっしょにスナック「ナンシー」に来た画家ふうの顎ひげの男のことばを思い出した。
――絵はあきらめて、画商に専念すると言っていたけれど、賢明な判断だね。……
伊庭は芸術家であることをあきらめたというが、それは昨夜きいた話であった。二ヵ月前に、森田が大阪のビジネスホテルを訪ねて会ったときは、まだその欲望は生きていたのであろう。
「そうです。その種の悩みは、われわれ凡人にはよく理解できませんがね。でも、うつくしくみえましたね。眼がきらついて、嫌う人があるかもしれません。けれども、あれはふつうの人の眼じゃないのですよ。私はいっぺんに彼が好きになりました。それで、なんとか彼のために役に立ってあげようと思ったのです。……話しているうちに、彼は芸術的な野心のほかに、母親……生みの母親に会いたいという願いがあることがわかりました。……そりゃ、まぶたの母親には会いたいでしょう。私は言ってやりました、あんたをすてた母親でしょう。あこがれるのはわかりますが、会えば、きっと失望するにきまっています、やめておきなさい、と。……私は確信できました。伊庭の母親は、まだ彼の身辺にすがたを見せていないのだ、と」
「ほう、そんなことだったのですか」
「私は一応、佐野君に会って、伊庭の母親は、彼につきまとったりしていない、それどころか、

彼のほうが探しているようだ、と報告しておきました」
「ああ……」
隆志はふつうの受け答えをしようかとおもって、喉から声を出しかけたが、それが途中で消されてしまった。顔もおぼえていない自分の母親の、まだ雰囲気ともいえない、そこはかとない薄い霞のような、あるかないかのにおいのごときものを、ふととらえたようにおもったからである。
「佐野君のほうからは、それはよかった、と言ってきました。サウスイーストのヘッドクォーターには、その女がアメリカから日本に行ったという情報があって、ますます濃厚に要注意であったそうです」
「よけいなお世話ですね」
隆志の口から、そんなことばが出てきた。彼の本心である。生みの母と会って、なにがわるいのか？
「ほう、あなたもそう思いますか」森田は手をのばして、隆志の指をつかんだ。隆志は左手をテーブルのうえにのせていたのである。軽くつかまれたようだが、隆志は相手の指にたしかな熱をかんじた。――「私もそうおもいました。サウスイーストの長老たちは、よけいなお世話だ。伊庭が母親に会いたい気持には、お金の分配や、相続やら、へちまやらをこえたものがあります。私はよくわかるんです。……」
森田もいくらか興奮したようだった。隆志の興奮が相手にうつったのかもしれない。
「私もよくわかります。ひょっとすると、あなたよりよくわかっているかもしれません」

と、隆志は言った。

「話がよくわかってくれますね。私はつぎになにを考えたか、おわかりですか？　佐野君の心配に反して、私はあろうことか、伊庭を母親に会わせたくなったのです」

「私だっておなじですが」

「そうです。冷静に考えてみれば、共有財産の分配の問題があって、母親に会うのは不利でしょう。けれども、バンコクのサウスイーストは、日本の佐野君の会社に調査を依頼しているんですから、佐野君に頼まれた私が、母親のことを黙っておればいいわけですよね。……ま、そんなふうに考えて、一肌ぬぐ気になりましてね」

「そうですか。……」

私だってと言いながら、隆志はためらっていた。彼は伊庭の母親がどこにいるかを知っている。いますぐにも言える。それにくらべて、森田は岡村奈津子しか手がかりがないようである。

「で、一方で私は伊庭にアドバイスしましたよ。お金はいくらあっても邪魔になるものではない、と。四十近くになった男が、それを知らないはずはないでしょう。分配のとき、権利放棄のようなばかなことをしてはいけないと、くり返して言ってやりました。そんなばかなことはない、というのが私たちの常識でしょう。くれるものを拒むのはばかで、世の中、そんなばかはいるはずがない。……だけど、伊庭と会っていると、これはそのいるはずのないばかかもしれないと、心配になってきましたね。そんな男ですよ」

森田のそんなことばを、隆志は房子のことばのうえに重ね合わせてみた。うまく重なるようだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com